様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　７ 月　７ 日現在

機関番号：１６１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ０２６８４

研究課題名（和文）地域遺産・世界遺産の価値を伝え合い自他の文化理解を深めるESD授業モデルの開発

研究課題名（英文）The Development of An ESD Class Model for Enhancing Students Mutual Cross-Cultural understanding through Exchanging Thoughts on Values of The Regional Cultural Heritages and the World Heritage Sites

研究代表者
金野　誠志（KANO, SEISHI）

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・教授

研究者番号：５０７０６９７６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：世界遺産がない地域で、その地域の文化遺産と国内外の世界遺産を取り上げ、それらを対照することで自分たちの地域を見つめ直し、どの地域にもある自分たちが誇りとする文化遺産やその継承について問い直す授業モデルを開発した。それは、文化遺産とは、誰にとって重要なのかということを考える学習となった。学習成果を検証した結果、文化遺産を継承する意味や意義を認識し、尊重し、継承していくという社会参画の意識を高めることが確認できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
「だれが、あるいはどの機関が文化遺産として認めたのかということが重視される風潮」、つまり、「遺産言説の権威化」が進んでいる。それは、世界遺産の価値を頂点とする文化遺産のヒエラルキーを強固にしていく。それは、無意図的であったにせよ、世界遺産より、国や地域の遺産の価値は劣るという認識を高める危惧がある。遺産が有する多様な価値の異同や関係性を踏まえた価値の認識や尊重について、他地域の学習者と伝え合い、保存や継承の重要性を検討していく学習は、このような危惧を解消する試みとして意義がある。

研究成果の概要（英文）：The author of this paper developed a class model for elementary students, in which students learn about some regional cultural sites in contraposition with the world heritage sites, for the students to have opportunity to consider to whom those heritages are significant as well as the meanings and inheritance of their honorable heritages. By checking their learning gains, it was verified that the students’ consciousness of social participation was enhanced through those considerations.

研究分野：文化間教育　グローバル教育　地理教育　価値観形成

キーワード：文化遺産　ヒエラルヒー　顕著な普遍的価値　ナショナルな価値　ローカルな価値　価値の相対性　価値の相補性　遠隔会議

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

世界遺産登録において、主観的な価値観が反映されやすい文化遺産では、欧州地域の遺産の偏重、キリスト教関連遺産の偏重等の是正が求められてきた。また、同一の歴史的・文化的・地理的文脈の中で解釈される複数の物件を、国境を越えてまとめて登録する動きもある。登録を審査する世界遺産委員会においては、全会一致の決定がなされない場合が近年散見される。しかも、地域振興や経済発展の手段として位置づけられる傾向が強く、このような状況下で世界文化遺産の増加には拍車が掛かっている。つまり、世界文化遺産が有するという「顕著な普遍的価値」の価値基準やその解釈は変遷しており、世界文化遺産の価値の相対的低下、新たに登録される文化遺産が有する「顕著な普遍価値」にも疑念が生じかねない。

このような状況の中で、UNESCO は世界遺産教育の推進を唱えているが、我が国においては、「顕著な普遍的価値」と世界遺産ではない文化遺産が有する価値との異同を明確にした上で、世界文化遺産登録の意味や意義を批判的に考察することで、遺産の継承について考える授業を開発したり、実践されたりしていないのが実情である。

２．研究の目的

UNESCO が発する情報は、「顕著な普遍的価値」を権威づけ、文化遺産の価値を誰が認めたかということで引かれる境界線が生じる。そして、世界文化遺産を最上位とし、国、自治体等の権威によって構築される文化遺産が有する価値のヒエラルヒーを顕在化させる。それは、保存する文化遺産に優先順位をつけたり，文化遺産が有する多様な価値を見えにくくしたりする。

本研究の目的は、世界文化遺産と地域文化遺産を教材として、各地の小学生が、自他の文化遺産が有する価値の異同や関係性を踏まえた価値認識を基盤として、それぞれの文化の価値尊重、価値への対応について探究したことをお互いに伝え合う授業を開発・実践する。その成果を検証した上で、自他の文化理解を深め社会への参画意識を醸成し、多様な文化集団の一員として多文化共生社会に資する授業モデルを示すことである。

３．研究の方法

本研究では、愛媛県西条市立神戸小学校を中核校として、三重大学教育学部附属小学校、広島県尾道市立長江小学校を連携校として、自他の文化理解の深まりに対応した、地域文化遺産と世界文化遺産の価値の認識・尊重・対応について遠隔授業で伝え合う前後 2 過程構成の ESD 授業を開発し、実践を行った。そして、学習成果を経時的に分析していくため、実践前と、実践の節目ごとに行う計 3 回のアンケート調査から、開発授業の有効性を検証することとした。以下の流れで、授業の開発・実践・検証を行った。

１）開発授業の前過程で、三重大学教育学部附属小学校が、既に世界遺産となっている国内の「紀伊山地の霊場と参詣道」、西条市立神戸小学校が 20 年近く世界遺産を目指しているが未だ登録されていない「四国遍路」、尾道市立長江小学校が世界遺産を目指していたが早々に登録を諦めた「尾道水道が紡いだ中世からの箱庭的都市」の調査・教材開発を大学教員と連携して行った。後過程で、愛媛県西条市立神戸小学校が、世界遺産登録を目指しているが国際関係上登録の見込みが極めて薄い台湾の潜在的世界遺産「烏山頭ダム及び嘉南大水路」の調査・教材開発を大学教員と連携して行う。また、世界遺産にはなったが保存や継承に問題が生じたオーストラリアの「ウルル，カタ・ジュタ国立公園」及びアイルランドの「シュケリッグ・ヴィヒル」の調査・教材開発を、大学教員が行った。(2019 年度)

２）西条市立神戸小学校第 5 学年を中核として、西条市立神戸小学校－三重大学教育学部附属小学校間、及び、西条市立神戸小学校－尾道市立長江小学校間で、「地域遺産・世界遺産の価値を伝え合い自他の文化理解を深める」遠隔交流授業を行った。授業開始前と 2)の授業後、アンケート調査を行った。(2020-2021 年度)

３）前年度と同集団の西条市立神戸小学校第 6 学年において、台湾の潜在的世界遺産「烏山頭ダム及び嘉南大水路」について「地域遺産･世界遺産の価値を伝え合い自他の文化理解を深める」学習を大学教員と連携して進めた。その学習終了後、大学教員が、「ウルル，カタ・ジュタ国立公園」及び「シュケリッグ・ヴィヒル」についての遠隔授業及び対面授業を行った。3)の授業後、アンケート調査と分析を行った。(2021 年度)

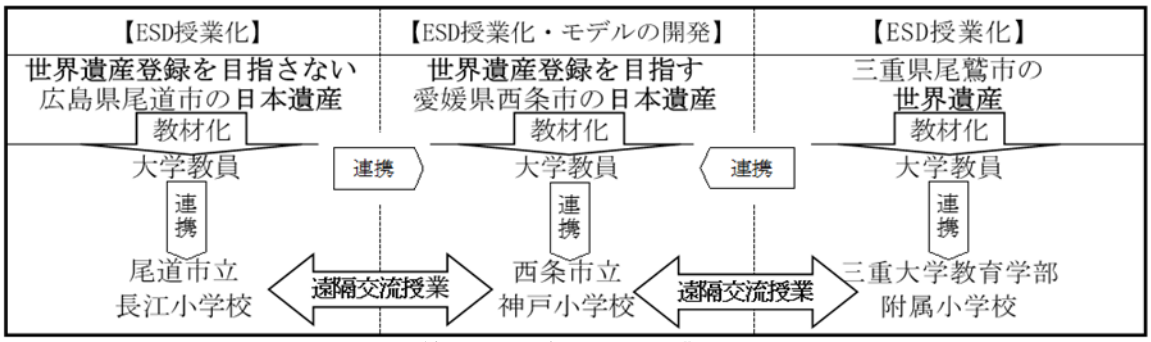
※2021 年度も、外国の「地域遺産・世界遺産の価値を伝え合い自他の文化理解を深める」授業を小学生同士で行う予定だった遠隔交流授業が、コロナ禍にあって困難となった。そのため、方法を一部変更し、大学教員との遠隔授業および対面授業を取り入れ代替した。

４．研究成果

（１）文化遺産の価値を伝え合う方法と展開

2019 年度に、遺産への価値対応について考える ESD 授業モデルを開発し、翌年度から翌々年度にかけて愛媛県西条市立神戸小学校第 5 学年梅組・第 6 学年梅組(両組は同集団)で総合的な学習の時間において授業を実施し検証した。前過程は第 1 図の通り神戸小学校で、校区や市内の

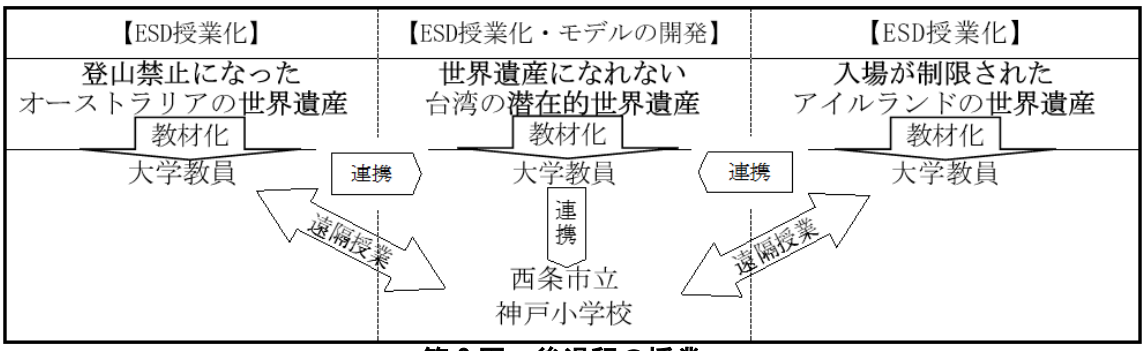
「四国遍路」を取り上げて認識した価値や保存や継承の現状、それへの尊重、他の２校の第４学年児童に遠隔交流学習で伝えることを目指して学習を進めた(9h)。他の２校も、神戸小学校との遠隔交流学習を目指し、それぞれ「紀伊山地の霊場と参詣道」と「尾道水道が紡いだ中世からの箱庭的都市」を取り上げて認識した価値とそれへの尊重、継承への対応を、遠隔交流学習で伝えることを目指して学習を進めた。その際、第１図の通りそれぞれの学校に対して３名の大学教員が指導・助言に当たった。



第１図　前過程の授業

遠隔交流学習では、各他地域では、人々が認識した価値の素晴らしさそれへの愛着、保存や継承に取り組んでいることを学び合った。また、一覧表記載をめぐり生じた賛否の意見から、世界遺産が有する「グローバルな価値」だけに人々の関心があるのではなく、遺産や遺産とともに歴史を積み重ねてきた自分たちが住んでいる国や地域への愛着と遺産の尊重との繋がりが明らかになるような展開とした(2h×2)。遠隔交流学習後、取り上げた３遺産の内、どの遺産の保存や継承に参加していきたいか考え選択する学習を通して、自分や他者の保存や継承に直接繋がる意欲や態度が何によって左右され､保存や継承といった対応の力の源となるか検討した｡その際、各々がどのような社会への帰属意識を重視しているか明確になるような展開とした(2h)。

後過程では、一覧表に登録されたにもかかわらず遺産の保存や継承が困難になった「ウルル，カタ・ジュタ国立公園」､「シュケリッグ・ヴィヒル」と対照するため(9h)、第２図の通り、神戸小学校では、「烏山頭ダム及び嘉南大圳」を取り上げ、文化遺産が有する価値やその保存や継承への取り組みや現状について学習を進めた。取り上げた３遺産については、第２図の通りそれぞれ大学教員が連携し指導・助言に当たったが、「ウルル，カタ・ジュタ国立公園」､「シュケリッグ・ヴィヒル」については、それらの価値や辿った経緯、保存や継承の現状、それらに対する尊重について、神戸小学校の児童の認識を深められるよう大学教員が遠隔授業や対面授業を行った(2h×2)。その上で、それぞれの遺産に対し、多様な人々が多様な立場で遺産が有する多様な価値をどのように捉えているか、遺産を尊重や対応をしているか考えた(1h)。



第２図　後過程の授業

遠隔学習後は、まず、この３遺産を取り上げ、自分がどの遺産の保存や継承に参加していきたいか考え選択する学習を行った。次に、「四国遍路」を加えた４遺産を取り上げて、自分がどの遺産の保存や継承に参加していきたいか考え選択する学習を行った。そして、自分や他者が保存や継承に対する意欲や態度が何によって左右され、遺産に対応する力の源となるか改めて検討した。その際、各々がどのような社会への帰属意識を重視しているか明確になるように展開し、自分たちにとっての遺産の価値認識、尊重が、それぞれの遺産に対する保存や継承の意欲や態度と深く関ることが自覚できるようにした(2h)。尚、1h は１単位時間が 45 分間の授業を示す。

（２）分析の方法と結果

実施した授業では、その実施前(2020 年９月６日)、前過程終了後(2021 年 11 月１日)、後過程終了後(2021 年 11 月 26 日)に､第１表の設問で児童にアンケート調査を行った｡項目 1～5 は、「四国遍路」に対する神戸小学校児童が有する関心・認識・尊重・対応の変革に関わる項目、項目 6・7 は、「四国遍路」の一覧表記載に関わる意識の変化に関わる項目である。項目ごとに、A.強く思う、B.少し思う、C.あまり思わない、D.全く思わないから選ばせ、A～D の順に 4.3.2.1 を

第１表　アンケート調査

標目		アンケート内容
学習成果	1.関心(遺産)	「四国遍路」について興味・関心がある。
	2.認識(遺産)	「四国遍路」の特色や価値をわかっている。
	3.尊重(遺産)	「四国遍路」のことを普段から考えている。
	4.対応(宣伝)	「四国遍路」をアピールする活動に参加したい。
	5.対応(保存)	「四国遍路」を保存する活動に参加したい。
意識	6.願望(記載)	「四国遍路」が世界遺産になってほしい。
	7.予測(記載)	「四国遍路」が世界遺産になると思う。

対応させ数値化し、一要因分散分析を行った。特に、項目 4.5 は社会参画への意志、7 は、一覧表記載の実現性に関わっている。

神戸小学校の対象児童 35 名の平均値、標準偏差、分散分析(Borferroni 法での多重比較)の結果を第 2 表に示した。自由度は全て (2, 68)で、標目 1,2,3,4,6,7 で 0.1%水準, 標目 5 で 1%水準の有意差であった。具体的には標目 1 と 2 では 1→3 回目で 0.1%、1→2 回目で 1%,2→3 回目で 5%水準の定向的な高まりが認められた。標目 3 は 1→3 回目が 0.1%、1→2 回目で 1%、標目 5 では、1→3 回目で 0.1%、1→2 回目で 5%水準での効果が認められた。標目 4 は 1→2 回目(数値減)で 1%、2→3 回目(数値増)で 0.1%水準の有意差だったが、1→2 回目と 2→3 回目では、負の効果を示した。標目 6 では、6 では 1→2 回目(数値減)と 2→3 回目(数値増)で 0.1%水準の有意差であったが、1→2 回目(数値減)は、負の効果を示した。標目 7 でも、1→3 回目(数値減)で 1%, 1→2 回目(数値減)と 2→3 回目(数値増)で 0.1%水準の有意差だったが、1→3 回目と 1→2 回目で負の効果を見せた。

第２表　アンケート結果

	標目	*N*	1回目		2回目		3回目		*F* 値	多重比較
			平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD		
学習成果	1.関心(遺産)	35	2.63	.81	3.14	.68	3.6	.55	16.58***	1回目<3回目*** 1回目<2回目** 2回目<3回目*
	2.認識(遺産)	35	2.37	.76	2.94	.71	3.37	.64	17.21***	1回目<3回目*** 1回目<2回目** 2回目<3回目*
	3.尊重(遺産)	35	1.94	.79	2.68	.78	2.94	.79	14.74***	1回目<3回目*** 1回目<2回目**
	4.対応(宣伝)	35	3.03	.77	2.34	.89	3.20	.71	11.05***	1回目>2回目** 2回目<3回目***
	5.対応(保存)	35	2.86	.93	3.34	.71	3.60	.64	8.12**	1回目<3回目*** 1回目<2回目*
意識	6.願望(記載)	35	3.60	.55	2.14	.68	3.20	.89	37.28***	1回目>2回目*** 2回目<3回目***
	7.予測(記載)	35	3.31	.62	2.23	.64	2.56	.68	24.11***	1回目>3回目** 1回目>2回目*** 2回目<3回目***

※有意確率は、*p<.05, **p<.01, ***p<.001,を示す。

標目 1 と 2 からは、授業を重ねる度に地域の遺産に対する関心や認識に対する感応が高まったことがわかる。標目 3 と 5 からは、前過程の授業で遺産に対する尊重や保存に対する感応が高まり、後過程の授業後も高いまま維持されていることがわかる。

標目 4 と標目 6 からは、一覧表記載に対する宣伝への対応との願望は、前過程の授業後に感応が低下しし、後過程の授業後に再び上昇している。これは、授業開始前、メリットだけを意識しバラ色にしか見えていなかった一覧表記載に対し、現実に生起した反対意見が前過程の授業でデメリットが強く印象に残ったからである。そのため、遺産の保存や継承の妨げに一覧表記載が妨げになるなら、宣伝や願望は好ましくないと判断と考えられる。後過程の授業を通して遺産が有する諸価値の相対性と相補性を学習し、諸価値の対立的捉えが軽減されて対応や願望への感応が上昇したと考えられる。標目 7 に関しては、前過程で、一覧表への記載の厳しさを学習し、記載の予測に対して感応が一時は低下したが、「四国遍路」よりも記載か難しいであろう台湾の潜在的世界遺産の学習したことの刺激から、後過程での学習でその厳しさが緩和され予測に対する感応が多少上昇したと考えられる。しかし、児童は予断を許さない状況だと悟っていると推測できる。つまり、最終的には、一覧表記載は願望としてあるが、実際は厳しいという意識があるということだ。

しかし、本授業を通して、世界遺産ではない「四国遍路」に対する対応の心的感応が、授業終了後には上昇しているという事実は揺るがない。関心・認識・尊重に対する感応が、上昇し続けていることと合わせると、文化遺産に対する価値対応について考え、文化遺産の保存や継承への参画意識を高めるという本授業モデルの有効性は検証できたといえよう。

※アンケート調査は、1 回目を 2020 年 9 月 6 日、2 回目を 2021 年 11 月 1 日、3 回目を 2021 年 11 月 26 日に実施した。この調査・分析に当たって、以下の論稿を参考にした。
永田成文(2019)「社会参加の意識を高める社会科と英語の連携による異文化理解教育の開発」『日本教育大学協会研究年報』第 34 集、日本教育大学協会、pp. 67-79

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　8件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 金野誠志	４．巻 26
２．論文標題 中学校社会科で台湾の文化遺産を扱う意義－地理的見方・考え方の視点を活用して－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 地理教育研究	６．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 金野誠志	４．巻 22
２．論文標題 文化遺産が有する多様な価値の再検討－台湾「世界遺産潜力點」を取りげた中学校地域学習を基にして－	５．発行年 2020年
３．雑誌名 グローバル教育	６．最初と最後の頁 2-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 金野誠志	４．巻 39
２．論文標題 台湾での歴史の相対化と 日本の教育への示唆－「郷土」教材を捉える新北市の学習者の視点に着目して－	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本教育大学協会研究年報	６．最初と最後の頁 37-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 金野誠志	４．巻 36
２．論文標題 地域遺産・世界遺産の価値について考える第４学年社会科学習の構想－日本遺産「四国遍路」と世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」を対照して－	５．発行年 2021年
３．雑誌名 社会認識教育学研究	６．最初と最後の頁 21-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24727/00029269	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 金野誠志	4．巻 28
2．論文標題 台湾の「郷土」教材と日治時期の近代化形成 及び文化遺産との関連に関する考察－「烏山頭水庫及嘉南大洲」を事例として－	5．発行年 2021年
3．雑誌名 地理教育研究	6．最初と最後の頁 22-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 金野誠志	4．巻 29
2．論文標題 地域遺産・世界遺産の価値を伝え合い自他の文化理解を深める授業試案－「ウルル，カタ・ジュタ国立公園」と「紅毛城及其週遭歴史建築群」を対照して－	5．発行年 2021年
3．雑誌名 地理教育研究	6．最初と最後の頁 11-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 永田成文・石田智洋	4．巻 72
2．論文標題 生活経験を基に市規模の様子を理解する小学校社会科学習－特徴的なまちの明かりに着目して－	5．発行年 2021年
3．雑誌名 三重大学教育学部研究紀要	6．最初と最後の頁 263-272
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 太田直也	4．巻 4
2．論文標題 ヴァーノン・ワトキンスのディラン・トマス批評	5．発行年 2021年
3．雑誌名 構築	6．最初と最後の頁 12-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 永田成文・萩原浩司	4．巻 第15号
2．論文標題 地域経済の活性化の視点から持続可能な社会を考える小学校社会科政治学習－EIMY概念に基づく電気エネルギーの地産地消に着目して－	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本社会科教育学会全国大会発表論文集	6．最初と最後の頁 230-231
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 永田成文	4．巻 30
2．論文標題 地域活性化に向けて観光資源の活用を考える地理ESD授業－他地域と伝え合う活動を通して－	5．発行年 2022年
3．雑誌名 地理教育研究	6．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 金野誠志
2．発表標題 文化遺産の価値を相対化する地域遺産学習－世界遺産と台湾の文化遺産との関係性から－
3．学会等名 日本国際理解教育学会
4．発表年 2019年

1．発表者名 金野誠志
2．発表標題 文化遺産が有する多様な価値に着目した学習の必要性－臺灣世界遺遺産潜力點を取り上げて－
3．学会等名 日本グローバル教育学会
4．発表年 2019年

１．発表者名 金野誠志
２．発表標題 世界遺産学習の再検討－文化遺産の所有と保護に視点を当てて－
３．学会等名 社会系教科開発実践学会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 金野誠志
２．発表標題 地域遺産・世界遺産の価値を伝え合い自他の文化理解を深める授業の試み－世界遺産と臺灣世界遺産潜力點を対照して－
３．学会等名 日本グローバル教育学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 永田成文
２．発表標題 世界遺産の顕著な普遍的価値への理解を深める地理ESD授業
３．学会等名 日本地理教育学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 永田成文・萩原浩司
２．発表標題 地域経済の活性化の視点から持続可能な社会を考える小学校社会科政治学習－EIMY概念に基づく電気エネルギーの地産地消に着目して－
３．学会等名 日本社会科教育学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 永田成文
２．発表標題 地域活性化に向けて観光資源の活用を考える地理ESD授業
３．学会等名 日本地理教育学
４．発表年 2021年

１．発表者名 太田直也
２．発表標題 ヴァーノン・ワトキンズとディラン・トマス――友人、詩人としての二人の関りについて――
３．学会等名 日本カムリ学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 太田直也
２．発表標題 Philip Larkin の“The Whitsun Weddings”について ― 最終連を中心として ―
３．学会等名 国際異文化学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 太田直也
２．発表標題 ディラン・トマス
３．学会等名 ボルダ企画・関西ウェールズ会共催『秋のウェールズ祭』（招待講演）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計2件

1．著者名 吉賀憲夫、岩瀬ひさみ、太田直也、太田美智子、梶本元信、小池剛史、永井一郎、久木尚志、平田雅博、廣野史子、松山明子、森野総子	4．発行年 2019年
2．出版社 明石書店	5．総ページ数 320
3．書名 ウェールズを知るための60章	

1．著者名 太田直也 著:川成　洋、吉岡栄一、伊澤東一編	4．発行年 2021年
2．出版社 彩流社	5．総ページ数 375(pp. 168-181)
3．書名 「言葉への意識の変容 ―― ディラン・トマスの「言葉の彩り」とW. B. イェイツ」『英米文学、多彩な文学解釈への誘い』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	太田　直也 (OTA NAOYA) (10203796)	高知学園大学・健康科学部・教授 (36403)	
研究分担者	永田　成文 (NAGATA SIGEFUMI) (40378279)	広島修道大学・人文学部・教授 (35404)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	山内　雅博 (YAMAUCHI MASAHIRO)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関